

『Japan To-Day』 (1)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

本連載では、英語文献にみる天理教をテーマとして、これまで天理教外の外国人によって書かれた天理教に関する学術論文や新聞記事などを見てきた。今回は、天理教外の日本人による英文での天理教紹介を見ていきたい。取り上げるのは、Kotaro Mochizuki『Japan To-Day: A Souvenir of the Anglo-Japanese Exhibition held in London 1910.』(Tokyo: The Liberal News Agency. 1910)である。この書籍のなかで、天理教は神道の一派として紹介されている。

まずこの著者である望月小太郎(1866～1927、政治家、弁護士、ジャーナリスト)について見ておきたい。望月は留学したイギリスで法律を学び、パリスター(法廷弁護士)の資格を得るとともに、経済や歴史も学んだ。帰国後は政治活動を開始し、明治後半から大正期にかけて、海外事情に精通し卓越した弁舌をもつ衆議院議員として、特に外交関係で活躍。また明治42年(1909)に英文通信社を設立し、日本の情報を海外へ、また海外の情報を日本へ発信した。彼が執筆や編集した書物は20冊近く、その約半数は英文であった。その内容の多くは、日本の実情の紹介と諸外国における日本評である。代表作として、『世界に於ける明治天皇⁽¹⁾』とその縮小版『世界評論明治大帝と我國民性』、また今回紹介する『Japan To-Day: A Souvenir of the Anglo-Japanese Exhibition held in London 1910.』(以下、『Japan To-Day』[現時の日本]と記す)などが挙げられる。

『Japan To-Day』(現時の日本)は、1910年にロンドンで開催された日英博覧会に合わせ、日本を紹介する英語書籍として作成されたもので、その高い評価により宮内庁から下賜金を受けている。日英博覧会は、日本政府と英国の博覧会会社の共催で1910年の5月から10月にかけてロンドン西部のシェパーズ・ブッシュで開催された。開催期間中、800万人を超える来場者があったとされる。開催の主な目的は、1902年に締結した日英同盟の強化、欧州への日本の先進性顕示、貿易振興・輸出増大による国富増加などであった。日本の美術品や建築模型などが多く展示され、また台湾、満州などでの植民地経営についての展示も行われた。この博覧会は好評を博したとされるが、その一方で台湾やアイヌの村落展示が「人間動物園」的であったとの批判もあった。⁽²⁾

この『Japan To-Day』(現時の日本)の「序文」で、望月は出版の目的と経緯に言及している。まず、1904年から1905年の日露戦争によって日本の存在は広く世界に知られ、国際社会で注目されるようになったため、欧米の人々は日本の政治、経済、社会、そして文化などに興味を寄せるようになったが、日本の本当の姿についてはまだ十分に知られていない、と述べている。そして、欧米の歴史家たちによれば、欧米諸国において文明は、ルネッサンス、宗教改革、政治改革、物質文明の進歩、貿易の発展、そして国際競争といった事柄を経て、各国ともほぼ同じ過程をたどり、現在の発展に至ったとする。一方、日本の文明の発展の仕方はこれらの欧米諸国とは異なっており、日本へは東西のさまざまな文明の要素がそれぞれ異なる時期に、そして多様な経路と形態をもって流入してきたのであり、日本は日本人特有の精神によってこれらを融合してきたの

であると主張する。そして、日本は古代アジアや近代西洋など世界のさまざまな文明を日本の文明に巧みに吸収してきたのであり、しかもそれは単に流行を追い求めたものではなく、絶妙な組み合わせとなっていると述べる。そのため、今日の日本を正しく理解し、その文明の本質を探究するためには、このような日本文明の形成の歴史を詳細にたどる必要があると主張したのである。

こうした考えに至ったのは、望月が8年間イギリスに留学したことが大きく影響しているようである。『Japan To-Day』(現時の日本)の「序文」では、上記に引き続き、イギリスから帰国した後のことについて、

自国の実情を世界に説明することが私の責務であると常に感じ、何年もの間、政治、経済、文学などの研究に専念してきた。1906年には英文日刊紙『Liberal News Agency』と英文月刊ジャーナル『The Japan Financial and Economic Monthly』を創刊し、昨年は『Japan and America』という書籍を出版した。機会あるごとに日本を諸外国へ紹介することが、私にとって最も喜ばしい義務の一つである、と常々感じてきた。そして、出版物を通して日本文明の概略を世界に紹介することは双方にとって有益であるとの信念のもと、日英博覧会という素晴らしい機会を利用し、本書『Japan To-Day』を出版するに至った。(原文は英語。日本語は筆者訳)

と述べている。

[註]

- (1) 望月小太郎に関しては、次の論文を参考にした。末木孝典「戦前期「外交通」議員の出現：望月小太郎の生涯と活動」『法學研究：法律・政治・社会』Vol.92, No.7 (2019年7月) 71～101頁。同「戦前期「外交通」議員と新外交：望月小太郎の外交論を中心に」『法學研究：法律・政治・社会』Vol.95, No.4 (2022年4月) 49～79頁。
- (2) この『世界に於ける明治天皇』は、「世界の人々が明治天皇にどのような印象を抱いたのかを国民に紹介したい一心から、二十余カ国の新聞雑誌を収集翻訳した大著」(明治神宮ホームページ「世界のなかの明治神宮」<https://www.meiji-jingu.or.jp/goitsuwa/?id=1749453570-539255> 2026年1月3日閲覧)とされる。英語版のタイトルは『The late Emperor of Japan as a World Monarch: Presented to Their Imperial Majesties, the Emperor, Empress, and Dowager Empress as well as to the other members of the Imperial Family On the occasion of the first anniversary of the late Emperor's decease July 30, 1913』(Tokyo: Liberal News Agency, 1913)。
- (3) 日英博覧会に関しては、次の書籍と論文を参考にした。倉田喜弘『1885年ロンドン日本人村』(朝日新聞社、1983年)、小山騰『ロンドン日本人村を作った男：謎の興行師タナカー・ブヒクロサン 1839-94』(藤原書店、2015年)、楠本町子「日英博覧会と明治政府の外交戦略」『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科編』第38号、2013年3月：41～56頁。